

平成18年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成18年4月11日

埼玉県病害虫防除所

タバココナジラミバイオタイプQの発生について

Bemisia tabaci Q-biotype

1 発生経過

平成18年2月下旬、県内各所から採取したコナジラミ類のミトコンドリアチトクロームオキシダーゼ (mt Co1) 領域を農林総合研究センターで遺伝子解析を行ったところ、数か所の個体はその塩基配列から他県で発生しているタバココナジラミバイオタイプQであることが判明した。

2 形態及び発生生態

(1) 形態

成虫及び幼虫の形態はシルバーリーフコナジラミとの差異はなく識別はできない。

(2) 発生状況及び生態

本虫は1996年にスペインで初めて確認され、その後2003年にイタリア及びイスラエル、その後中国雲南省及び北京で発生を確認している。タバココナジラミは世界中に広く分布しており、約40のバイオタイプが知られている。国内では在来（バイオタイプ不祥）、バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）そしてバイオタイプQが確認されており、それらは遺伝子型により区別が可能である。

国内では2005年2月に九州沖縄農業研究センター上田氏が国内初発生を報告していて、同年には九州、山陽山陰地域で発生を確認、2006年には関東地域の神奈川県、千葉県、栃木県、茨城県で発生が確認された。

(3) 被害

ア トマト、ミニトマト、トルコギキョウ等にトマト黄化葉巻病ウィルス(TYLCV)を媒介する。

イ シルバーリーフコナジラミと同様に吸汁による生育遅れ、分泌物に寄生するスス病による果実の汚れがある。

(4) 採集植物

今回、トマト、キュウリ、花き類（ポインセチア、ランタナ）でのハウスから採集し

個体が、タバココナジラミ バイオタイプQと確認された。他県の報告によれば寄主範囲は広く、キュウリ、メロン、トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、シシトウ、ガーベラ、茎ブロッコリー、サツマイモ、アスパラガス、ブーバルディアなどに寄生すると報告がある。

3 防除対策等

- (1) ピリプロキシフェン剤、一部のネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤に対する感受性が低い。
- (2) 施設の開口部を防虫ネット（0.4mm）で覆い、コナジラミ類の侵入を防ぐ。露地栽培では寒冷紗等でトンネル被覆し外部からの成虫の侵入を防止する。また、UVカットフィルム、反射資材等も利用し、これらの物理的防除法を中心とした総合防除対策を行う。
- (3) 薬剤散布を行う場合は、有効薬剤に対する抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。
- (4) 施設内部やほ場周辺の雑草は発生源となるため、増殖源となる施設内外の雑草は除去する。
- (5) 発生ほ場の作物残さは土中に埋めるかビニールを被覆して虫を死滅させる。施設栽培終了後は施設を密閉処理して虫を死滅させてから作物を片付ける。